

巻頭言

モダニズム建築の評価の基盤

評議員・京都工芸繊維大学造形工学科教授 石田潤一郎

今年の春、広島平和記念資料館と世界平和記念聖堂という戦後建築（前者は1955年、後者は54年の竣工）が国の重要文化財に指定された。画期的なことが起きたという感慨はあったが、特に驚きはしなかった。昭和12年の宇部市民館まで指定の下限が来ていたし、登録文化財も戦後の物件の選定が視野に入ってきていることは聞いていたから、太平洋戦争の前後を指定の分水嶺とするようなことはないだろうというふうに見ていた。それでも、今回の指定で、文化財行政がある決定的な線を踏み越えたという印象は強く持った。新しいかどうかではなくて、ついにモダニズム建築を重要文化財にみとめたことの意義は大きいと考えたからである。

ドコモモという、不思議な響きの団体をご存じだろうか。"DOcumentation and COnservation of buildings,sites and neighbourhoods of the MOdern MOvement"（「モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織」）という長い名前の略称である。1988年にオランダで生まれ、2003年現在で44ヶ国が加盟している。日本は1998年に活動を開始し、2000年に本部から支部として承認された。こうした団体が生まれるということは、裏を返せば、モダニズム建築が、モダニズム王国と呼ばれるオランダでさえ、破壊され、記録も失われてきたということにほかならない。ロンシャンの礼拝堂は建って10年そこそこで文化財になったじゃないとか、チューゲンハット邸は世界遺産だという人もいるだろう。でもそれはル・コルビュジエやミースだからで、ヨーロッパでは一般に歴史様式の建築は大事にするぶん、モダニズム建築には冷淡だ。サヴォア邸がかつて荒廃していたことは知る人も多いし、近年でもマレ・ステファンスの作品が危殆に瀕していると聞いたことがある。こうした状況への危機感としてドコモモが設立され、その危機が世界共通だからこそ、多くの支部が加入する。

日本人は、欧米諸国と比較すれば、モダニズム建築を好む国民だと思う。それでも、旧東京都庁舎など、できてから壊されるまで建築界以外の人からほめられたことはなかったのではないかと思えるほどだし、京都の南禅寺にあった東山会館も同じようなものではなかったか。ひるがえって、幕末・明治以来の洋風建築の保存のされ方を見てみよう。日本建築学会は、1960年に「明治建築の保存に関する建議書」を文部大臣と当時の文化財保護委員会に提出している。この文書は「明治時代における建築物で、文化的、技術的、芸

術的にすぐれた価値を有するものを、速やかに文化財に指定」して、保存を図れと訴えるものであるが、この「文化的、技術的、芸術的」という価値づけの並べ方に注意したい。つまり、明治建築は「文明開化」の証人といった文化史的価値が第一で、芸術的価値は3番目におずおずと指を折る程度に思われていたことをうかがわせるのである。実際、『建築雑誌』上に「明治建築は、古典建築に比して、作品としての魅力に乏しい」といった文言が堂々と載っていた。それが、1965年に開村した博物館明治村が大人気を呼んだり、大阪・中之島の洋風建築保存運動が起きたりすることによって、社会の側は洋風建築を高く評価していることが明らかになっていく。それに後押しされて（もちろん、それだけではないにしても）、文化庁は次々と指定を進め、建築学会も倉敷アイビースクエアや中京郵便局に賞を呈するようになっていった。

モダニズム建築の保存はいわばその逆の道筋をたどろうとしている。ドコモモという専門家が最初に評価し、一般市民がその見方を学んでいるという状況である。ドコモモ・ジャパンは2000年にモダニズム建築の好例として20件を選び、さらに昨年100選を選定している。その図面や写真・模型を展示した東京での100選展はかなりの入館者を獲得したし、それにもまして、タイアップして発売された『カーサ・ブルータス』の特集号は好評で、少なくとも学生レベルでは一気に知名度が上がった。今春の前川國男展と吉村順三展は朝日新聞の「天声人語」で取りあげられたこともあって、大盛況となった。秋に大阪で100選展を開く手伝いをしている者としてはまことに喜ばしい。

しかし、手放して喜べないところがある。今の学生と話していると、ある種のモダニズム建築は「重くて暗くて、とにかく好きになれない」のだそうだ。この10年ほど、日本の現代建築は、軽くて透明な表現を突きつめてきた。街を見ても雑誌を見ても、明るくて物質感のない建築物ばかりになった。どうやらその結果、建築とはそういうものだと思っている世代が生まれてきたらしいのだ。彼らは京都会館も香川県庁舎も受け付けない。教師としては、彼らに、それらを評価する価値観が世の中にあるということを理解させることで満足しなければならない。

以前、藤森照信さんが、広島平和記念資料館とマルセイユのユニテ・ダビタシオンが世界二大ピロティ建築だと話していた。そして、ユニテのピロティをくぐっても何も無いが、広島のパロティの向こうには、負の遺産の極致の原爆ドームがある、広島の勝ちだ、といかにも「野蛮ギャルド」の巨匠らしい発言をしていた。たぶん、こうした会話が、ことさらな説明なしに誰もが楽しめるようになったとき、ほんとうにモダニズム建築の理解が進んだといえるのだろう。